

オゾン把握 地表付近も

大気汚染予測にも効果

光化学スモッグの原因となる地表付近のオゾンの分布を、奈良女子大と米ハーバード・スミソニアン天体物理学センターのチームが人工衛星のデータを使って把握することに世界で初めて成功した。東アジアでは、高濃度の領域が中国沿岸部から日本へ国境を越えて広がる様子が確認できた。12日、オランダで

開催される国際学会で発表する。

従来、衛星を使った

オゾン

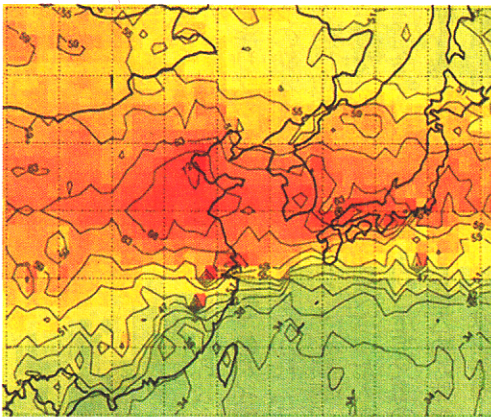
3個の酸素原子から構成され、水の浄化、漂白などに使われる。大気中の濃度が高くなると光化学スモッグの原因となる一方、成層圏(高度10〜50キ)のオゾンは、有害な紫外線をさえぎる役割がある。

オゾンの観測では、高度による濃度の違いを見分けられなかった。チームは、オゾンの量を高度ごとに検出する

計算方法を開発。米航空宇宙局(NASA)の衛星が2004年10月以降に観測した東アジア地域のデータを解

析し、高度3キ以下の地表付近の分布を調べた。

奈良女子大の林田佐智子教授(大気科学)は「中国からの越境汚染の証拠をつかむことができた。国境を越えて広がる大気汚染の予測や対策に役立てたい」と話す。【田中泰義】



東アジアで昨年6月に検出された地表付近のオゾン分布。赤いほど濃度が高い—林田佐智子・奈良女子大教授提供